

# 彙報

昭和五十八年十月十七日、東海大学湘南校舎11号館に於いて、第二回東海大学文明研究会大会と総会が開催された。総会では、昭和五十七年度の決算案と昭和五十八年度の予算案とが承認され、本年度の会務報告と来年度の予定等々が報告された。

## 昭和五十八年度

### 第二回東海大学文明研究会大会

講演

『日本文明の核心』 カリフォルニア大学名誉教授 アメリカ・カナダ11大学日本研究所所長 デルマー・ブラウン  
研究発表

『プラトンの「国家」の線分の比喻について』 本学大学院生 三宅立夫

『グリヒヤーストラにおけるウバナヤナについて』 本学大学院生 折居貴子

## 昭和五十八年度

### 東海大学文明研究会例会

四月例会（四月二十五日）

『テオグニスにおける正義について』 本学大学院生 柳鶴優子

五月例会（五月二十三日）

『アンベードカルと現代』 本学大学院生 小山義則

『文化の定義について』 本学大学院生 阿部宗人

七月例会（七月五日）

『一八三〇年代ベンガルにおける社会的影響力の性質』 本学大学院生 八代和雄

『バルビユスの「地獄」とカミュの「異邦人」』 本学大学院生 惟村宣明

十一月例会（十一月二十八日）

『東西二大文化圏の連合体としての日本』 本学大学院生 安田

衛史

『ライン河と中世の町並』 本学研究生 北川康正

十二月例会（十二月十六日）

『アンプロジウスの“De Sacramentis”に見る奉献文について』 本学大学院生 鈴木真理子

## 昭和五十八年度

### 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻修士

#### 論文題目

阿部 宗人 文化進化の過程

折居 貴子 *Sihyasitra* における *upanayana*

鈴木真理子 西方典礼成立期におけるアンプロジウスの果たした

役割について——特に奉献文をめぐって——

仲田 星子 ファンタジーとして見る『ナルニア国ものがたり』

柳鶴 優子 ヘシオドスとテオグニスにおける政治的見解——  
Guns と知性の働きを中心に——

### 昭和五十八年度 文学科卒業論文題目

#### 文明日本課程

五十嵐利和 井上日召の反政府論と宗教

池田 淳子 神奈川県下における婚姻の風習

一色今日子 神奈川県下に見られる婚姻制度と家制度の関わり

井上 重信 千利休の死——利休の死の真相と死の原因についての諸説の批評

上田 徹 岩崎弥太郎と三菱

内田 聡 相模原台地の農業開発——河水統制事業の前後を中心——

海老原 優 手塚治虫研究——『火の鳥』に見られる生と死——

大澤 義明 信濃の農耕儀礼

大庭久美子 女性の雇用について——増加するパートタイマーの現況と展望——

奥田 勝也 現代仮名遣についての私の意見

小沢 明子 日本最初のストライキについて

小野 悟 福沢諭吉の家庭教育論——子供達の思い出を中心——

金子 吉直 埋立て開発に伴う地域社会構造の変化

奥石 良太 吉田松陰と兵学——山鹿流の兵学を中心——

小峰 光 松平定信の教育思想——寛政異学の禁の藩校立教館への影響をめぐって——

近藤百合子 細川ガラシャ夫人——その人物像は宣教師の立場から作り上げられた——

斎藤 努 新渡戸稲造『武士道』についての一考察

佐藤 和彦 『福翁自伝』の「緒方の塾風」にみる塾生の生活と勉強——現代の学生との比較——

佐藤 敏雅 日本人の時間感覚

椎木 政子 ベストセラー文学における日本人像の変遷——戦後を中心として——

新木 芳実 明治時代の食文化——伝来食品を中心に——

鈴木 浩希 利根運河の建設とその衰退

高橋 栄治 日本人の朝鮮観

高島 真澄 明智光秀の謀反——織田信長の家臣たちへの波紋

田代 昌毅 坂本竜馬の自己確立について

寺川 健吾 倉橋惣三「子供の讃歌」の一考察

土手 英嗣 遊びの研究——広島・岡山における子供の遊び——

中島 政美 「武士道」と「騎士道」の比較研究——生麦事件の原因をめぐって——

中村 純 加藍配置を中心とした禅宗寺院の特徴

長尾 訓枝 坂本龍馬——海援隊結成までの思想と行動

長島 守 城下町人と封建制の関わり合い

長谷川貴美子 戦後の廃娯運動と女性の地位

梶中 政江 吉田松陰の女子教育論

馬場 正孝 沼田街道の道祖神の一考察

藤村 伸一 福永武彦「忘却の河」にみる罪觀念の一考察

星野 史郎 小林病翁の教育論

細見 幸司 兵庫東加東郡社町上鴨川住吉神社の神事——主に宵宮と本祭より——

堀口 信 武蔵野西部の農家構造

松島 道康 吉田松陰の勞農觀

松本 貴子 檀山節考の世界

武藤 淳 ダム建設に伴なう村落社会の崩壊——小河内ダムを例として——

村木信一郎 西洋兵学者としての勝海舟

矢尻 達哉 現代住宅の住み方——東京と新潟の場合——

大和 聡美 北条政子——その女性像——

渡辺 朗 福沢諭吉の人物研究——少年期につちかったもの——

渡辺 慎司 天道と運

飯塚貴美子 紬産地の構造変化

五十嵐 誠 祭礼と人々——岩船大祭の場合——

石井 和子 近代日本の恋愛と結婚——モルガンゆきの生涯をめぐって——

川名富美子 森鷗外の一考察——『独逸日記』と『舞姫』を中心

に——

宇山 光昭 瓦版

大宜味正樹 東北六県から首都圏への人口移動の分析

大原 弘嗣 遠藤周作の作品にみる信者像について——『沈黙』を中心にして——

大村 光俊 「永代日記」に見る稲葉氏の領内統治

小川 裕司 西郷隆盛評価についての一考察

小熊 倫生 大愚良寛

小沢 幸喜 諏訪精密工業の下請構造——形成と現状——

小野 晃 外国教科書に見られる日本歴史——その明治維新前後——

狩野あけみ 屋敷神

北島 茂 戦後の大衆音楽

黒崎 文夫 足利尊氏と安国寺利生塔

小林 修 北海道における川とアイヌ語地名

斎藤いづみ 江戸時代における染織文化——江戸小紋——

坂口 みな 近代女性ことばの一考察——二葉亭四迷の作品を中心に——

佐藤 網恵 福沢諭吉の学問観

篠原 信行 戊辰戦争における箱館政權研究——榎本武揚がめぐらした新政權像——

杉森 晴好 遠州大念仏における村落の關係

鈴木 徹 『徳川慶喜公伝』の慶喜像について——大政奉還をめぐって——

高橋 勝哉 豊嶋氏と石神井城

めぐって——

高橋 勝哉 豊嶋氏と石神井城

高村恵里美 川路聖謨の人物研究——「長崎日記・下田日記」を

中心に——

竹井 進二 西郷隆盛謫居における意義

堤 隆 細石刃に関する一研究——神奈川県大和市上草柳地区出土の資料を使って——

刀禰 淑子 宮川流域の保存食——朴葉利用にみる飛驒川との地域差——

中村 洋一 宇垣纏における昭和期武人の一考察

長坂 守高 近世出版文化における一考察

永野 圭一 三浦氏の仏教文化——鎌倉時代武家文化との関係——

西村 弘子 竹久夢二を通してみた一九二〇年代

長谷川 透 武蔵野西部における新田立地の水利

馬場 洋一 加賀藩制下における一農村の生活史

平野 嘉一 四国遍路の近年の変化

別角真奈美 明治期における女性と職業——楠本イネと荻野吟子の場合——

細野 直樹 自殺死亡統計による環境要因

堀江 明弘 市街地再開発と商店街再編成——小田急沿線3都市を事例として——

松永 明義 風俗と広告文（コピー）——キャッチフレーズの機能——

港屋 和人 高杉晋作と松下村塾

村澤 君子 松尾多勢子の政治意識について——尊王攘夷論との

関連——

山口 敦子 平安時代の貴族女子の化粧に関する調度と道具について

山本日出和 日本文化の中の「中世」——「愚管抄」・「神皇正統記」の共通所説（仏教）比較——

吉原 裕二 角館における歴史的町並みの保存

渡辺 勝哉 志賀重昂の植民地主義観——「南洋時事」と「知られざる国々」に見るその変化——

渡邊 昌夫 戦後の横浜港の衰退

佐野 均 宅配サービスの現況について

文明東アジア課程

赤岩 敏彦 中国の体育・スポーツ

浅妻 純一 印刷術発明時期の問題について

阿蘇品陰晃 アジアにおける経済発展のダイナミズムに関する巨視的な分析並びに考察

雨宮 靖 鎮海軍節度使李錡の反乱における一考察

海老岡芳弘 太平天国農民蜂起における一考察

大石 太 在日華僑の日本国籍取得における若干の考察

岡田 康 一八八〇年代の日本と金玉均

小畑 賢浩 北ベトナム爆撃と民族解放戦争

加藤さなみ 中国の琵琶について

金井由美子 任那日本府に関する一考察——官人の検討を中心と

して――

岸 みどり 中国の鉄鋼業と宝山製鉄所

桑川 裕一 西洋文化撰取による教育の考察

小出 淳一 則天武后と宦官

佐相 晴久 信濃毎日新聞にみる朝鮮人虐殺事件

清水はる美 中国における茶の役割について

白石 秀樹 日帝支配下の朝鮮における色服奨励運動に就て――

宇垣総督期を中心に――

志和池尚之 始皇帝の統一に見る政治思想の一考察

須田 浩和 中国における一人っ子政策

関川 裕二 光州学生事件――事件発生原因とその後――

染谷 尚孝 前漢の西域経営の開始

高瀬 順子 北宋末期に於ける方臘の乱と両浙路周辺の茶塩賊との関連について

高橋 和幸 保護条約締結から二・八宣言までの在日朝鮮人運動

高橋 智子 中国の教育が青少年に及ぼす影響とその対応に就て

田邊 均 洪秀全、拜上帝会とキリスト教の関係

谷口 武彦 唐代伝奇小説に見る怪奇動物の擬人化

中西 望 農民八億――食糧不完全自給――

新田 肇 関東大震災における朝鮮人虐殺事件について――神奈川県を中心として――

根井 浩 「土地調査事業」と朝鮮農民について

深田由紀子 中国における入試制度

福永 典子 五四運動以後の婦人解放運動――都市と農村におけるその違いと共通性――

古木 克己 前漢時代の租税について

堀 雅之 七世紀後半から八世紀前半に於ける日・羅関係について

皆川 弥 文化大革命及び下放政策と開放政策にみる中国社会主義の矛盾

宮 善栄 旗袍に至る袍服の流れと現代旗袍に対する一考察

宮部 政子 江青

山口 修 古代中国仏像の南北相違の追求

山崎 律子 日帝治下における朝鮮婦人運動――権友会の活動を通して――

山邊 厚子 日本との対比にみる現代中国の労働安全衛生の法の位置と現状の考察

山本 泰弘 武帝期及び王莽期における官名改称について

横山 琴江 今後の中国の洋服に与える中国民族服の影響

吉野 雄三 楊家太極拳に於ける武術性の衰退

三橋 博之 中ソ論争――平和共存政策における中ソ対立要因について（一九六〇～一九六五）

加藤 義昭 一九七六年に於ける鄧小平失脚の一過程

古賀 友敏 新疆に於ける林則徐

斎藤 文弘 景德鎮御器廠と民窯

笹本 建夫 「阿Q正伝」の一考察

谷村 浩文 製紙術の開発に於ける蔡倫の意義についての考察

柳沢 清一 アヘン戦争前の弛禁論の没落と嚴禁論の抬頭

山本裕一郎 集権的管理体制から分権的管理体制への過渡期を迎えた中国について

### 文明南アジア課程

青山 浩徳 第一次非暴力不服従運動期のガンディー

池田ともに ベンガルにおける近代演劇の成立

泉澤 茂樹 インド文化に与えたギリシア文化の影響——美術・思想の面から——

大山 雅史 デリーとその周辺におけるムスリムの墓建築・モスクに関する研究について

岡部 圭子 ヒンドゥー女性とインドの近代化——サロージナリニニダッタの生涯をめぐって——

岡村 宣興 アタルヴァ・ヴェーダの呪法について

小川和佳子 インド女性の結婚

尾崎 隆康 密教と頭教の思想比較（真言宗と浄土教）

久野 恵一 中国支配下のチベット民族

斎藤 正明 一七世紀デカンにおける在地領主層の成長

斎藤真美子 シルヘット県の人口推移（一八七二—一九四一年）

——ヒンドゥー・ムスリム関係を中心に——

佐藤 朱実 笑劇『マッタヴィラーサ』における滑稽の構造

高橋 敦子 古代インドの祭式——多神教の時代から祭式の内幕

化へ——

高橋 恭子 ラージャ・ラーラム・モーハン・ローイの社会改革運動

鳥越 真哉 南アフリカにおけるサッティヤグラハ闘争と非暴力主義

力主義

中嶋 英之 古代インドにおける家長の生活慣習及び義務

中丸 信之 仏教伝道に関する南伝と北伝の比較

前村起久子 ジャジマニ・システムについて——ワイザー説にも

とづいて——

正木 美佳 印度更紗考

三浦 徳彦 コーンウォリス体制の確立と崩壊

矢上 周 ラーマクリシュナ運動とその思想

山本 律子 四念処観の変遷

横田 光恵 コミュナル裁定（一九三二）をめぐる論争について

若杉 吉通 古代インドにおける婚姻制度

渡辺 美子 『十地経』にみる菩薩行

明石 和仁 アシヨークア王と法（ダルマ）

中島 功 ヨーガスートラにおける修行の哲学と心について

### 文明西アジア課程

小林由美子 キサース（同害報復刑）にみる慣習法のイスラム化

による変化について

下山 勝也 イスラエル建国に至るシオニズム運動

新藤 則子 古代エジプト社会における奴隷制についての一考察

新谷 薫 イズニク陶器における模様の変遷

杉本 憲彦 八世紀から十一世紀におけるシジルマーサ

鈴木 英房 セルジューク朝のワズイールとその職務

柴田 志麻 現代シリアにおけるバース党——そのイデオロギーについて——

中川 武 現代ジハード論について

中西 岳 ワッハブ主義とイフワーンの関係について

服部 吉明 サファビー朝時代のイスファハーーン

古池みさき 古代エジプト社会における女性の地位に関する一考察

松本 健志 ナセル政権下における教育と近代化

宮崎 尚美 アッパース朝の中央官制

向田 智尚 ジャデイドの展開とバスマチ運動にみる中央アジアのトルコ・ナシヨナリズム運動の段階と性格

森杉 成道 中近東における遊牧の実態

渡辺 秀子 現代ソ連邦中央アジアにおけるムスリム

佐伯 和彦 一九四一〜四五五年のトウード党の活動

築根由起乃 「白色革命における農地改革——農民側から見た成果についての一考察」

福尾 浩之 パレスチナ民族運動とユダヤ民族運動

南浦 功 現代トルコにおけるイスラームの復古主義へ国民教

済党の活動

大津 文章 イラン立憲革命

文明東ヨーロッパ課程

新野 武郎 ハンガリー事件、チェコ事件、アフガニスタン事件における日本人のソ連観

石見 浩則 昔話の中の古代ロシアの風習について——風習の形成過程一考——

鬼沢 祥典 C・Ю・ウイッテ——ロシア帝国主義における彼の存在——

粕田 迅 スタニスワフ・レムの哲学と作品の独自性について

勝田 和之 ポーランド連帯——その将来とソ連の対応——

菅 真一郎 冷戦期の東欧

木村 栄 ソビエト政権下における宗教——その弾圧の歴史と現在の状況——

久次米秀子 セルゲイ・エリセエフとロシア

楠 和久 ロシア革命におけるスターリンの社会主義論

楠 孝浩 スターリン——一九〇〇年から一九二七年——

窪田 智浩 ポリシエヴィキ党とエスエル党の農民政策の対立について

栗山 邦明 ゴーゴリの文学に見る官吏社会の矛盾

栗山まき子 ロシア・アバンギャルド芸術研究——その舞台装置を中心として——

小久保 浩 第二次世界大戦中における占領下のポーランド

近藤 彰一 ピョートル大帝論——ロシア帝国確立までの足跡——

武下 信介 日露戦争とロシアの国内情勢

谷村 憲久 日ソ貿易の発展と役割について——日ソさけ・マス

漁業交渉について——

手嶋健太郎 一九〇五年における黒海艦隊の反乱について

永井一草二 コルベ神父とゼノ修道士の日本における活動

長井由香里 メンシエヴィキの滅亡

西村 邦之 ゴーゴリの悪夢——幻想的な作品についての一考

察——

野崎 達也 農奴制について

野村 紀文 アレクサンドル・ネフスキーによるロシア存亡戦

——主にネバ河の戦い氷上の戦いについて——

原 正規 チャイコフスキー——メック夫人宛ての手紙にみる

彼の人物像——

堀田まなみ マケドニア問題——IMROの変遷と近隣諸国の政

策——

本郷 早苗 モスクワ公国成立期の修道院——主にトロイツェ

・セルギエフ修道院を中心として——

牧田 充哉 レーニンとマルトフ——その出会いと訣別——

松岡 寿男 日ソ貿易の実情と将来展望

松村 達三 ソビエト児童文学作品における Чужовский, К. И.

による児童に対する文章表現の効果

——特に《КРОКОДИЛ》について——

真野 幹也 ツェペシユの独立的行動の動機

鈴木 幹夫 ソ連の体育教育——ステート・アマチュアの根底——

### 文明西ヨーロッパ課程

青山 美雪 衣服が人間にもたらしたもの

新井 博 ベンツとワーゲン——両社の歴史と政治的關係——

井沢 靖夫 フォークランド紛争

石原 綱成 「アルブレヒト・デューラーのイタリア旅行につい

て」——北と南の間で——

伊藤 誠一 理想国家における人間の条件

井上 潤 ジョン・レノン John Lennon

海上美峰子 古代ギリシアにおける重装歩兵制についての一考察

梅原 敏之 日本とイギリスの教育制度の比較

江積富士子 アフリカとヨーロッパ——ECの対アフリカ政策ロ

メ協定——

大河原紀子 統合教育からみた今日の教育——西ドイツにおける

私立の学校を題材として——

大滝 啓男 ナチ党初期発展と大衆について（社会的背景と大衆

不満）

大村 敏弘 ハイデッカーの『存在と時間』における人間の死

加藤 秀幸 ロックの政治社会の論理

岸井 亮 めまいとしての遊び

木村 義雄 「ヒットラー」の人種思想

九嶋真寿美 西ドイツと日本における戦後復興比較論



幸田 恭子 科学と宗教的世界像

小山 聡子 森鷗外とドイツ文学

齋藤 知子 古代ギリシアの道——生活における意義——

神保 勉 ジャン・リユック・ゴダールの自由の希求

杉崎 芳子 ナポレオン政治の一考察——その時代背景と政治的特色について——

鈴木 節子 婚姻におけるドイツと日本の相違

関野 孝紀 生物学と哲学の關係

高梨美由紀 シュイクスピアの悲劇

高橋 由美 アウグスティヌスの救済について

竹内 英規 ランボーを考える——ランボーの内に見る生——

坪井美奈子 ゲーテとイタリア——イタリアとの出会い——

土井 浩欣 ヒットラーを出現させたもの

能勢 暁哉 マキャヴェリにおける運命観とその時代背景

灰谷 伸人 ヴェーバーの近代論——ヨーロッパ近代社会における人間性——

波多野達也 ド・ゴール論

原 守 ホップズの国家論についての考察——それは、果たして絶対君主擁護の理論であったのか——

平城 宏之 イギリス病

深見 暢之 理想国家の統治者について——プラトンの国家論における——

藤田 敬子 ギリシヤ人からみたエジプト観——ヘロドトスを中心として——

心として——

細貝 俊也 近代競馬の発達における遊びの意味の移り変わりに

松浦 三佳 読む童話

松本 秀治 チェムバレンと有和政策

水谷 勝志 フロイトの神経症論——とくに強迫神経症について——

光行めぐみ フランスの農業——その諸構造と諸問題——

宮島 健一 ビートルズ

目黒 章浩 プラトンにおける全体主義思想と民主主義

望月 浩己 ナチズムの台頭とその遺産

森山 尚 アリストテレスの理想国

山内 保仁 フランス革命とナポレオン

山崎 玲子 世紀末芸術論

山本登志治 ヘシオドス神話の普遍的意義

横山由起子 「ケインズ革命」と経済思想

吉村 弘 コリングウッドの文明論

渡辺 茂 ドイツ社会民主党の理想と現実——社会民主主義の継承者としてのドイツ社会民主党の歴史の変遷と労働組合の経営参加政策について——

森 ひかる 産業革命の一帰結としての核文明

青山 昌恵 フィレンツェの画家——サンドロ・ボッティチエリ

浅川 茂夫 生に対する意識の回復について——E・フロムの思想をもとに——

後村 文昭 錬金術にみる物質観の転換と化学的技術の意義

飯塚由美子 ナチズム成立とその背景

石田 修子 ウーマン・リヴのはざままで——一九五〇年、一九六〇年におけるアメリカ女性の葛藤を中心として——

伊藤 浩一 音楽の迷宮——音楽の記号伝達における文化および心理学的背景と問題点——

伊東 直也 フリードリッヒ・マイネッケとドイツ史学思想の考察——歴史主義の問題——

岩崎 紀子 下村寅太郎氏における「レオナルドの絵画科学」

梅田 秀樹 一七世紀のイギリスに於ける理想的統治形態——ロック研究——

江崎 志麻 古代ローマにおける宗教観

大場 直人 ヒットラーはなぜユダヤ人を殺したのか

大場 英文 フェデリコ・フェリーニが描く「愛」の認識による魂の救済

小野 成規 スポーツ文化における競馬——イギリスとアメリカの比較——

木村 洋美 フランス人と日本人——その文化の比較考察——

木本 朱美 古代ギリシアにおける水の観念について

小林 睦子 生命とは何か

斎藤 邦彦 近代オリソピックの諸問題とその本質的意義

櫻庭 俊樹 フロムにおける人間観

清水 圭子 ホームロスにおける来世観

菅原 元子 神殿の変遷——ポリスとの関係について——

杉山 剛二 食生活と文明

鈴木 幸子 プラント「パイドン」にみる魂の不死の証明——霊魂不滅論について——

関口 幸 イギリスの階級について

藪田千恵子 イエス・キリストの罪の赦し

田口 芳克 新しい音楽としてのロックにおける発展とその特性について

西沢 真 ジョン・ロックの人間知性論における経験主義的人間観

野村 康弘 人間の幸福——ゲート「ファウスト」——

長谷川雅子 日本におけるFENの意義について

八田 百合 「ゴドーを待ちながら」とその旋回

春山 明 人類の進化について

平野 千聖 アテーナー・女神の神格について

藤木 邦子 世襲親王家——フランスと日本の王位継承法——

古山 茂 中世錬金術の一解釈

牧野 光起 テオドール・ヘルツ そのシオニズム

松元 伸泰 イタリア・ルネサンスにおけるマキアベリの人間観と政治観について

三浦 真理 フランス革命における女性の宿命——王妃マリー・

アントワネットの生き方――

三瀬 弘子 アメリカ最初の開拓者ビルグリム始祖

三村 和久 ヤスパースと道元――自己概念の比較――

毛受 昌昭 フォイエルバッハの無神論――彼の無神論の本質――

望月 泰宏 チャップリン映画におけるメッセーシ

八重樫和也 戦間期のドイツにおけるロケット熱

山口恵理子 現代におけるシュタイナー教育の意義

山崎 浩 古代ギリシアにおける市民生活について――倫理と  
経済の観点――

山田 良治 ロマン・ローランにおけるトルストイ

山本 鍊平 人間不平等起源論におけるルソーの文明批判

吉江由美子 キャロル・ファンタジ

吉野 輝美 キリスト教の愛とフロムからみた現代西洋人の愛の  
比較について

石井 利直 G・ガリレイの天文学分野における功績と人間像に  
関する考察

井上 明美 ベリー公のいとも豪華なる時禱書――フランス中世  
生活史からの考案

川上 貴子 昔話の類似性について――その要因と意義――